



“工業彫刻職人”として65年の人生、今も現役だ ～タガネからNC機械へのデジタル化時代にも生き残る!!～

有限会社小原彫刻工業 取締役会長 小原 健司氏

衰退する工業彫刻業界

今年3月に80歳を迎えた。長男基雄氏に平成23年から社長職を譲り、経営は全部任せたが工業彫刻の仕事は継続している。しかし、この工業彫刻技術は産業界のニーズがすでに大きく下降、日本全国での同業者は衰退の一途である。関東地域でも工業彫刻そのものの仕事が減り、初代の人達も事業継承者がいない場合は廃業を決断するか、自分の健康を見ながら存続をしているという状況である。工業彫刻組合でも最近ではどんどん廃業とか倒産で約180社くらいあったのが38社になっている。その残った会社でも後継者がいる企業はほんの数件。後は時期が来れば辞めるという。

丁稚奉公時代に腕を磨く

小原会長は旧制中学校を卒業する時に母親が亡くなった。兄弟4人の長男だったため、進学をあきらめざるを得ず、2代目のガラス金型専門の彫刻屋に丁稚奉公に入った。

本人は小さい時から口数が少なかったが手先はすごく器用な子供だとほめられていた。たとえば竹の箸を使ってやすりで簡単に耳掻きの先を作ったり、小学校の時から夏休みになると裏庭で大工仕事のように船を作ったりすることが好きだった。そして技術屋になりたいと思った。記憶力が良くなかったのも、いつも母親から「人が5やる時にはお前は8くらいやらないと人並みになれない」と言われていた。

15、6歳で丁稚奉公に入った。兄弟子からどやされながら仕事を覚えていくのだが、3年くらい経た時、父親に「辞めたいなー」と口に出すと「3年くらいでそんなこと言ってちゃ何をやっても一人前になれないぞ!」「そんなことを言うんじゃ家に入れなぞ」とどやしつけられた。

それで泣く泣く我慢をして丁稚奉公を続けた。

住込みで朝は4時に起き、工場の表も裏も掃いて自転車を磨いて、今日の親方の仕事の段取りを見て道具類をそろえ、細かい栈のあるガラス戸も丁寧に拭くという日常の生活であった。

しかし、夕方6時頃、作業が終わると、工場の外にある廃材を拾ってきてタガネとヤスリ、キサゲを使い一人で彫刻の訓練していると女将さんから近所の手前みっともないからやめろと言われたという。

日曜日など休みで誰もいない現場で修練をしたが、前に女将さんから禁じられているので、いない時をみはらかって修業した。その時に作ったもので、今残っているのが認め印。径が5mmくらいの真鍮のレールを拾ってきて5cmくらいの棒にしてその上部は“小原”という苗字、下部には薔薇の花のデザインをタガネで掘った。丁稚になって4年目くらいの内緒の修業中の作品を今でも記念に持っている。

7年で独立 4畳半の仕事場

7年くらい経った後24歳で独立した。最初は4畳半のアパートを借りた。機械も何もない。机一つが作業場だった。彫刻だから手作業でできた。丁稚の時から、これからは機械がなければだめだと思っていた。親方に機械を買って欲しいと言ったが買ってもらえなかった。

25歳で結婚。29歳の時に現在の会社の土地を購入し、修行時代のお客さんが独立した時に彫刻の仕事もくれた。それで食べることができ、恵まれていた。

その時に念願の彫刻機も買えた。手彫りから彫刻機に移る。しかし、当初は手彫りより作業時間が掛かるという皮肉な現象もあった。だんだん慣れてきて機械化の威力が出てきた。彫刻の組合に

も加入して同業者の状況が分かってくると、どこも放電加工機を導入して使っていることを知る。

そこで金をためて買うと同業者はすでに4、5台持っている。さらに旋盤、倣いフライス盤だというように機械加工時代に突入した。すぐNC時代へと進化する。NC機械だけでは動かない。プログラム作成も重要な仕事である。

当時入社した器用な子が一人いてプログラムも習熟するなり、マシニングセンター等も操作ができる。そうするとベテランの職人よりも若い者の方が上達は早く、職人より機械をモノにして天狗になってしまった。

職場は陰悪な雰囲気も醸し出す。若手の社員は「俺がいるからこの会社がやって行けるんだ」と思ってしまう。ベテラン職人はまだタガネが主力だが後輩は機械を使う。モノによっては先輩より良いものができる。社員同士で喧嘩になり若い者に辞められてしまった。それで大騒動になった。その時長男が慶応大学の理工学部を出て、千葉県的光製品関係等の金型会社に勤務してまだ3年目だったが、父親の会社を手伝ってくれることになった。その長男がプログラムをやってくれたことで会社が救われた。

息子に継がせても心配ごとが尽きない

「今は倅と一緒に仕事ができるというのは幸せだ



デジタルシボ加工



下から製品、電極 金型



と思っている」。しかし、逆にこの先、この仕事を何年やっていけるのかというプレッシャーを感じている。だから同業者は子供を継がせないと決めている人が多い。10年前からそのような変化を感じてどのように時代の要求に彫刻が追随できるか考えてきたが、今は彫刻技術を生かした金型部品も手掛けることにしている。売り上げの10%が工業彫刻、90%が精密金型の3次元スキャナー等によるデータ作成から、MC加工の部分的な部品加工となっている。

彫刻機で加工する時代から放電加工に入る。この時も電極作りに苦労した。彫刻作業は金型製作と異なり、ボリュームが小さいため、電極作りにウエイトが掛けられない。

そのため、いかに低コストの電極を作るかという課題に挑戦する。銅の溶射・ casting等を試みたが上手くいかず電気鋳造機を自社製作する。これも素人がチャレンジしたため苦心の後、結果的に成功をする。

今は加工ではNC工作機械、特にマシニングセンター時代。これを買うのに自宅を売って購入したこともある。家族は工場の一隅に引っ越す。5年後にやっと新しい家を手に入れたという。

小原会長は根っからの彫刻職人。頭の中は3次元の図面が一杯詰め込まれている。完全にCAD/CAM時代になった今でも人間が表現できる自由曲面の加工は、機械加工では難しい部分があり、そこには彫刻という職人技は残るだろう。現実には化粧品の容器や飲料品の瓶の仕事は直接超大手企業から注文が入ってきている。日本の技術を支える小さな企業も平等に生き残る道を探っている。

(I)